

大学進学時の意思決定に与える影響の要因に関する研究 -大学スポーツの要因を考慮して-

プロフィットエンジニアリング研究

5215F020-0 永山 恵輔
指導教員 大野 高裕

A Study on the Factors for Choosing the University to Attend -Considering the Aspect of College Sports-

NAGAYAMA Keisuke

1. はじめに

私立大学の経営における収入源の半分以上は学生からの入学金や授業料等による帰属収入である。そのため入学者や受験生を確保するための学校マーケティング活動は非常に重要である。近年、これまでの大学がサービスを提供する売り手市場から学生が大学を選ぶ買い手市場へと学校マーケティングの構造が変化している。Riesman[1]はこの現状を踏まえ、学生消費者主義を提唱した。日本の大学においても喜多村[2]が1980年代後半から1990年代にかけて学生消費者主義が現れていると提唱している。喜多村[2]は日本の大学における学生消費者主義の到来によって、大学によるPR活動の活性化や、学生による授業評価の高まり、大学の評価対象がキャンパスライフ等の中身まで扱うようになったとしている。さらに近年では少子化による若年層の減少や私立大学の増加により、ますます学校マーケティングは重要になると考えられる。そのため大学側は学生のニーズに合わせたマーケティングを行うことが必要であると考えられる。学生が大学を選ぶ立場になることで、これまで教育に関わる部分のみであったマーケティングの要因が、キャンパスライフ等の大学を取り巻く環境にまで多様化している。そのため大学にとって、学生がどのような条件を考慮して受験し、大学に何を求めて進学してくるのか要因を明らかにすることは非常に重要である。

考慮すべき要因は様々あると考えられる中で、近年大学スポーツの効果が着目されている。大学スポーツの役割としてはスポーツを媒介して人を育てる、教育するといった役割の他に、宣伝効果によってより多くの学生や質の高い学生を確保するといった側面がある。大学スポーツの効果の一例として、2008年箱根駅伝で優勝を果たした東洋大学の出願者数が、次年度に約1万人増加したという事実がある。

これまで大学進学時に考慮する条件や進学理由に関する要因についての研究は数多く行われてきた。しかし、こうした研究では要因の関係性についての研究はほとんど行われていない。そのため本研究の目的として、まず大学進学時の意思決定のプロセスをモデル化し、関わる要因の関係性を明らかにする。また大学進学に関わる要因として、大学スポーツが与えている影響について明らかにする。

2. 従来研究

まず大学進学時に考慮する要因についての研究としては、栗山ら[3]らの研究が挙げられる。栗山ら[3]の研究では、高校生が進路決定において、どのように複数の考慮する要因を満たして決定に至るのかを共分散構造分析を用いて検証している。大学志望動機に関する要因についての研究としては、淵上[4]、古市[5]の研究があげられる。淵上[4]は因子分析により、要因として「大学の本来的功能」、「家族への配慮と規律機能」、「モラトリアム機能」、「大学の副次的機能」、「大学の経済価値機能」の5つの要因があると結論付けている。古市[5]は「勉学志向」、「無目的・同調」、「資格・就職志向」、「享楽志向」の4つの因子を抽出し、淵上[4]によって抽出された要因との対応付けを行っている。三保ら[6]の研究では大学の進学理由に関する概念の整理を行い、大学進学理由には目的をもって進学した自律的な理由と目的をもたずに進学した他律的な理由のパターンに分けられるとしている。

これらの研究のほとんどが影響する要因の抽出のみで因子の関係性を示してはいない。また本研究で提案しているスポーツの要因がモデルに組み込まれていない。そのため本研究ではこれらの研究を参考に、大学進学時の意思決定のプロセスをモデル化し、関わる要因の関係性を明らかにする。また大学進学に関わる要因として、大学スポーツが与えている影響について明らかにする。

3. 本研究の提案

3.1. 本研究の概要

本研究においては、大学進学時の意思決定のプロセスをモデル化し、関わる要因の関係性を明らかにする。以下の3つのSTEPにより分析を行う。

STEP1 大学進学時の意思決定のプロセスのモデル化

STEP2 STEP1に影響を与えると考えられる要因の設定

STEP3 要因の関係性についての仮説構築と、共分散構造分析による仮説検証

3.2. 大学進学時の意思決定モデルの構築

STEP1 大学進学時の意思決定の流れのモデル化

大学進学時の意思決定モデルは図1のように表せる。まず大学に進学しようとする意思があり、様々な考慮条件を加味する。その後大学を選択する際に大学の進学理由が存在す

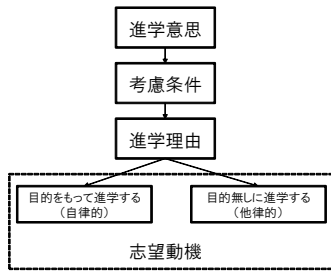


図 1. 大学進学の意味決定モデル

る。その進学理由には目的をもった自律的な志望動機と目的をもたない他律的な志望動機が存在する。そして実際に入学に至るというプロセスで現在の大学へ進学をする。本研究ではこのモデルの中で考慮条件から進学理由、そして志望動機に関わる要因の関係性を明らかにする。

3.3. 構成要因の設定

STEP2 STEP1 に影響を与えると考えられる要因の設定

構成要素に関しては、従来研究で抽出された要因を参考に表 1 のように設定する。まず大学進学時に考慮する条件に関して栗山ら[3]の研究より抽出された「興味のある学問」、「大学生活の充実」、「学問での知名度」、「金銭的理由」、「合格可能性」の 5 つの要因として取り上げる。次に大学進学理由に関して測上[4]、古市[5]の研究より抽出された「設備の充実」、「大学の本来の機能」、「大学の副次的機能」、「大学の経済価値機能」、4 つの要因を設定する。また本研究で提案した大学スポーツに関する要因を選定し、モデルに組み込む。

また三保ら[6]の研究より、大学進学理由には目的をもって進学する自律的な志望動機と、目的をもたずに進学する他律的な志望動機がある。本研究では自律的な志望動機を「自律的志望動機」、他律的な志望動機を「モラトリアム機能」、「保護者への配慮」と定義する。

表 1. 各要因の定義

興味のある学問	学びたい学問、興味のある学部・学科
大学生活の充実	友人関係、大学での文化的な活動
学問での知名度	研究や学問のレベルでの知名度
金銭的理由	学費の安さ、奨学金制度の充実
合格可能性	自分の成績、志望校の競争率
スポーツでの知名度	箱根駅伝等の体育会部活動による知名度
スポーツ活動の充実	スポーツ系のサークル活動、体育会部活動の観戦や応援
設備の充実	キャンパスや研究設備の充実、大学の雰囲気
大学の本来の機能	専門知識を深めたい、教養を深めたい、自分の可能性を広めたい
大学の経済価値機能	就職に有利、社会的地位の向上
大学の副次的機能	大学で多くの人に出会いたい、大学生活を充実させたい
自律的志望動機	目的をもって進学する自律的な志望動機
保護者への配慮	親孝行のため、親への負担を減らすため
モラトリアム機能	なんとなく、大学で遊びたい

3.4. 要因間の仮説構築と提案モデルの検証

STEP3 要因の関係性についての仮説構築と、共分散構造分析による仮説検証

まず仮説全体の構造に関して、図 2 に示す。図 1 と照らし合わせて、考慮条件に関する要因を「興味のある学問」、「スポーツでの知名度」、「スポーツ活動の充実」、「大学生活の充実」、「学問での知名度」、「金銭的理由」、「合格可能性」の 7 つとする。また進学理由に関する要因を「設備の充実」、「大学の本来の機能」、「大学の副次的機能」、「大学の経済価値機能」の 4 つを取り上げる。志望動機に関しては、自律的な志望動機を「自律的志望動機」、他律的な志望動機を「モラトリアム機能」、「保護者への配慮」で構成されているものとする。

次に、これらの要因の関係性について表 2 のように仮説の設計を行う。仮説 1 と仮説 4 から 6 に関しては栗山ら[3]の研究より作成した。仮説 7 から 12 に関しては測上[4]、古市[5]の研究より作成した。スポーツ関連の仮説に関しては、大学生活の充実等の大学の副次的機能に影響があると考えられるため仮説 2 と仮説 3 として作成した。また大学の経済価値機能に関しての仮説は、「モラトリアム機能」「保護者への配慮」といった受身の大学志望動機に影響があると考えられるため、仮説 13 と仮説 14 として作成した。

4. 結果

4.1. 使用データ

本研究では、大学生から大学院生を対象に、大学進学時の考慮条件及び大学の進学理由について 2016 年 12 月 9 日から 12 月 16 日にかけて採取した 130 人分のアンケートデータを用いる。アンケート項目は表 1 の各要因の定義を参考に 43 項目を設定し、それぞれ 5 段階評価のリッカート尺度を採用する。共分散構造分析のサンプル数は 5,590 (=43 × 130) であり、分析には IBM SPSS Statistics version 23 及び IBM SPSS Amos version 23 を用いている。

表 2. 本研究での仮説

仮説 1	興味のある学問は大学の本来の機能に正の影響を与える
仮説 2	スポーツでの知名度は大学の副次的機能に正の影響を与える
仮説 3	スポーツ活動の成実は大学の副次的機能に正の影響を与える
仮説 4	大学生活の成実は大学の副次的機能に正の影響を与える
仮説 5	大学生活の成実は大学の経済価値機能に正の影響を与える
仮説 6	学問での知名度は大学の経済価値機能に正の影響を与える
仮説 7	金銭的理由は保護者への配慮に正の影響を与える
仮説 8	合格可能性はモラトリアム機能に正の影響を与える
仮説 9	設備の成実は自律的志望動機に正の影響を与える
仮説 10	大学の本来の機能は自律的志望動機に正の影響を与える
仮説 11	大学の副次的機能は自律的志望動機に正の影響を与える
仮説 12	大学の経済価値機能は自律的志望動機に正の影響を与える
仮説 13	大学の経済価値機能は保護者への配慮に正の影響を与える
仮説 14	大学の経済価値機能はモラトリアム機能に正の影響を与える

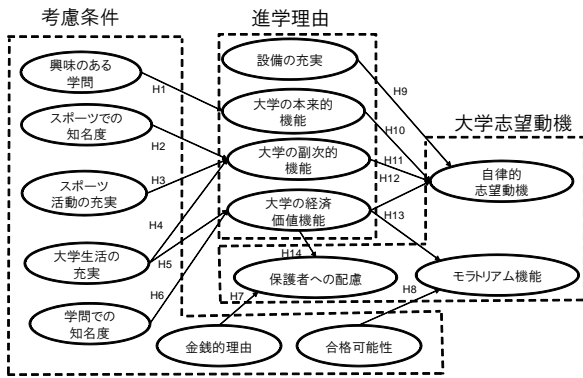


図 2. 本研究の提案モデル

4.2. モデルの適合度

本研究の提案モデルに関して共分散構造分析におけるモデルの適合度を表 3 に示す. CFI については良好水準 (0.900 ≤ 基準値 ≤ 1.000) を下回っているが, RMSEA については可水準 (0.080 ≤ 基準値 ≤ 0.100) を満たしている. したがって本研究のモデルの全体構造は妥当であると判断する.

4.3. 観測変数と潜在変数間の有意性

アンケート項目である観測変数と潜在変数間のパスの優位性を表 4 に示す. 結果は全ての観測変数について 1% 有意である.

4.4. 潜在変数間の有意性

潜在変数間のパスの優位性を表 5 に示す. 結果は大学生生活の充実と大学の経済価値機能間, 金銭的理由と保護者への配慮間, 合格可能性とモラトリアム機能間, 大学の経済価値機能と大学志望動機間, 大学の経済価値機能とモラトリアム機能間は 5% 有意で, 他はすべて 1% 有意である.

4.5. 潜在変数間のパス係数

潜在変数間のパス係数を図 3 に示す. 結果として仮説 2 と仮説 4, 仮説 12 が棄却され, 他はすべて支持されている.

5. 考察

5.1. 棄却された仮説について

まず仮説 2 に関して, 大学受験時に考慮したスポーツの知名度と大学の副次的機能には因果関係がないことを表してお

表 3. モデルの適合度指標

カイ 2 乗値	830.339
自由度	421
p 値	0.000
母数の数	75
CFI	0.792
PCFI	0.717
RMSEA	0.087

表 4. 観測変数と潜在変数間のパスの有意性

潜在変数間のパス	検定推定量	p 値
大学の設備 1 < --- 設備の充実		
大学の設備 2 < --- 設備の充実	4.294	***
雰囲気 < --- 設備の充実	3.7	***
学びたい学問 < --- 興味のある学問		
興味のある学部・学科 < --- 興味のある学問	9.017	***
本来的機能 1 < --- 大学の本来的機能		
本来的機能 2 < --- 大学の本来的機能	3.934	***
本来的機能 3 < --- 大学の本来的機能	6.336	***
知名度 (学問) 1 < --- 知名度		
知名度 (学問) 2 < --- 知名度	12.296	***
経済価値機能 1 < --- 大学の経済価値機能	6.777	***
経済価値機能 2 < --- 大学の経済価値機能	6.647	***
経済価値機能 3 < --- 大学の経済価値機能		
友人関係 1 < --- 大学生活の充実	9.903	***
友人関係 2 < --- 大学生活の充実		
文化的活動 < --- 大学生活の充実	5.813	***
サークル・部活動 < --- スポーツ活動の充実		
観戦・応援 < --- スポーツ活動の充実	11.8	***
副次的機能 1 < --- 大学の副次的機能		
副次的機能 2 < --- 大学の副次的機能	11.63	***
副次的機能 3 < --- 大学の副次的機能	4.942	***
学費 < --- 金銭的理由		
奨学金制度 < --- 金銭的理由	2.631	0.009
保護者への配慮 1 < --- 保護者への配慮		
自分の成績 < --- 合格可能性		
合格 < --- 合格可能性	4.091	***
モラトリアム機能 1 < --- モラトリアム機能		
モラトリアム機能 2 < --- モラトリアム機能	3.646	***
モラトリアム機能 3 < --- モラトリアム機能	3.519	***
志望動機 1 < --- 自律的志望動機		
志望動機 2 < --- 自律的志望動機	14.65	***

*** 1% 有意

り, 自律的志望動機にはスポーツでの知名度が関係していないことがわかった. これによって大学スポーツは進学理由となるわけではなく, あくまで大学の名前を知る 1 つの手段になるのではないかと考えられる.

次に仮説 4 に関して, 大学受験時に考慮した大学生活の充実と大学の副次的機能には因果関係がないことがわかった. これは, 大学の副次的機能が自律的志望動機に正の影響を与えていることから, 大学生活の充実を考慮することは目的を持たず, 他律的な志望動機に影響を与えていると考えられる.

仮説 12 に関しては, 大学の経済価値機能が自律的志望動機に影響を与えていないことがわかった. これは「社会的地位を得たい」「良いところに就職したい」といった大学から与えられるものではないため, 自律的な大学進学動機とは関係がなかったのではないかと考えられる.

表 5. 潜在変数間のパスの有意性

潜在変数間のパス	検定推定量	p 値
大学の本来機能 <---- 興味のある学問	5.634	***
大学の副次的機能 <---- スポーツ活動の充実	11.475	***
大学の経済価値機能 <---- 知名度	3.446	***
大学の経済価値機能 <---- 大学生活の充実	1.985	0.047
保護者への配慮 <---- 金銭的理由	1.986	0.047
モラトリアム機能 <---- 合格可能性	2.2	0.028
自律的志望動機 <---- 大学の本来機能	4.017	***
自律的志望動機 <---- 大学の経済価値機能	-2.239	0.025
自律的志望動機 <---- 大学の副次的機能	2.74	0.006
大学志望動機 <---- 設備の充実	3.379	***
モラトリアム機能 <---- 大学の経済価値機能	2.434	***
保護者への配慮 <---- 大学の経済価値機能	4.547	***

*** 1% 有意

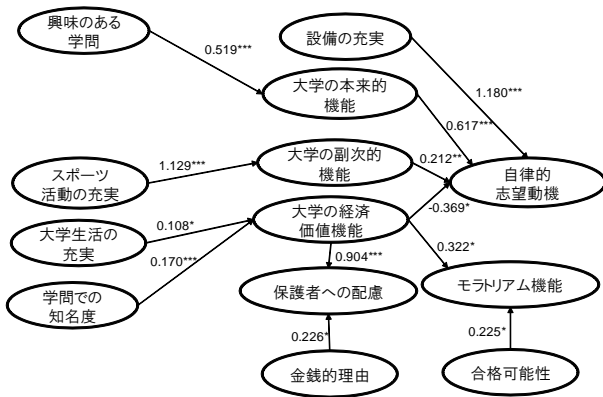


図 3. 潜在変数間のパス係数

5.2. 大学スポーツに関して

まず大学スポーツに関して、スポーツの知名度に関しては大学進学動機に影響を与えていないことがわかったが、スポーツ系でのサークル活動や体育会部活動の観戦・応援といった大学のスポーツ活動は大学の副次的機能に非常に大きな影響を与えていることが実証された。しかし大学の副次的機能は大学進学動機に影響を与えていることが実証されたが、影響が小さな値となっている。そのため大学スポーツは間接的に多少の影響を与えてはいるが、志望動機に大きな影響は与えていないと考えられる。

5.3. 大学志望動機全体に関して

自律的志望動機に影響を与えていた要因は「設備の充実」、「大学の本来機能」、「大学の副次的機能」であることがわかった。これらは本研究での仮説が実証された。

中でも「設備の充実」は自律的志望動機に対して非常に大きな影響を与えており、キャンパスの設備や大学の雰囲気といった要因は、自律的志望動機の進学理由として非常に重要であるということが考えられる。また「大学の本来機能」に関しても大きな影響を与えており、同様に重要であるということが考えられる。「大学の副次的機能」に関しては正の

影響を与えているが、値としては小さな値となっている。これは「設備の充実」、「大学の本来機能」といった要因が進学理由として非常に強いために、このような結果になったと考えられる。しかし進学理由として、学問以外の側面も要因として関わっていることがこの結果より実証できた。

しかし「大学の経済価値機能」に関しては自律的志望動機には影響を与えておらず、「モラトリアム機能」や「保護者への配慮」といった他律的な志望動機に影響を与えていることがわかった。そのため、「社会的地位を得たい」、「良いところに就職したい」といった動機は大学に特に目的なく進学する人に影響していると考えられる。

6. おわりに

本研究では大学進学時の意思決定のプロセスをモデル化し、関わる要因の関係性を明らかにすることができた。また要因として、大学スポーツが与えている影響について明らかにすることができた。結果として、まず大学スポーツは間接的に多少の影響を与えてはいるが、志望動機に大きな影響を与えているとは与えていないことがわかった。また大学志望動機に関しては、自律的志望動機と他律的な志望動機に対してどのような進学理由が影響しているのかを実証することができた。結果として「社会的地位の向上」、「就職に有利」といった「大学の経済価値機能」は他律的な志望動機に大きな影響を与えていることがわかった。

今後の課題としては、大学ごとの差異の検証が必要であると考えられる。今回は不特定多数の大学を対象としデータを取得したが、偏差値などの大学の条件によっては関わる要因が異なる可能性があると考えられる。

参考文献

- [1] Riesman, David. : On higher education : The academic enterprise in an era of rising student consumerism, Transaction Publishers, pp. 117-130 (1980)
- [2] 喜多村和之 : 「学生消費者主義の時代-パークレイの丘から-」, 玉川大学出版部, pp. 59-63 (1996)
- [3] 栗山直子, 上市秀雄, 齊藤貴浩, 楠見孝 : “大学進学における進路決定方略を支える多重制約充足と類推”, *The Japanese Journal of Educational Psychology*, Vol. 49, No. 4, pp. 409-416 (2001)
- [4] 淵上克義 : “進学志望の意思決定過程に関する研究”, *The Japanese Journal of Educational Psychology*, Vol. 32, No. 1, pp. 59-63 (1984)
- [5] 古市裕一 : “大学生の大学進学動機と価値意識”, 進路指導研究, 日本進路指導学会研究紀要, *bulletin of the Japanese Society for Study of Career Guidance*, Vol. 14, pp. 1-7 (1993)
- [6] 三保紀裕, 清水和秋 : “大学進学理由と大学での学習観の測定 : 尺度の構成を中心として”, *キャリア教育研究*, Vol. 29, No. 2, pp. 43-55 (2011)